収穫祭のシーズンです

▼みんなの畑収穫祭案内チラシ

今年は、夏の暑さが幸いしたようで、どのコットン畑でもフワフワの茶色い綿がたわわに実っています。例年より一足もふた足も早い収穫最盛期ということになりそうです。

小名浜上神白地区のコットン畑に設けられた「みんなの畑」でも収穫作業が進められています。そして、「みんなの畑」としてのコットンの収穫を祝おうと、11月17日に「収穫祭」が計画されています。午前中は畑でのコットン収穫体験。お昼は永崎団地集会所でミニコンサート付きの交流会を催し、午後には下神白集会所を会場に綿繰り、糸紡ぎ、コットンランプシェード作り体験教室を開催することになっています。是非一人でも多くの皆さんのご参加をお待ちしています。

第17回いわき地球市民フェスティバル開催

本会が事務局を務める「いわき地球市民フェスティバル」が、10月27日いわき産業創造館6F企画展示ホールで催されました。今年のフェスティバルも、昨年に引き続き「外国にルーツを持つ市民による日本語でのスピーチコンテスト」をメイン企画として、12名の出場者のスピーチを楽しみに70名ほどの市民が集まりました。

出場者の皆さんは、「こうなったらいいな　明日のいわき」というタイトルに沿って、様々な思いを流暢な日本語で披露しました。いわきの豊かな自然を高く評価して、ぜひ世界に向けて情報発信しましょうと呼びかけるスピーチ。子供たちが公園で遊ぶ姿を目にすることが少ないことを残念がるスピーチ。海外の食材が手に入るようになったらいいという提案するスピーチなど力作ぞろいでした。その中でも、一般の部大賞に選ばれた押川マリアさん(小学６年生)の「母国フィリピンと日本との不幸な戦争という歴史を繰り返さないように平和を守りましょう！」というスピーチには、聴衆全員が胸を打たれていました。

コンテストの審査結果を待つあいだに行われた交流会では、出場者を囲んで団欒の輪が広がっていました。

イオンフィナンシャルサービス(株)から寄付金をいただきました

10月20日、いわき市泉町滝尻中ノ坪にあるコットン畑に、イオンフィナンシャルサービス株式会社とグループ会社の皆様、68名が、揃いのビブスを着用してコットン収穫のためにおいで下さいました。このプロジェクトを応援しようとグループ会社の皆様が寄付金をご持参下さったということで、畑に到着してすぐにその贈呈式が行われました。力強いご支援に、この場をお借りして御礼申し上げます。

▲目録を贈呈下さるイオンフィナンシャルサービス株式会社河原健次社長

その後、参加者の皆様は2反ほどの畑に思い思いに散らばり、熱心に綿の収穫を行って下さいました。収穫最盛期を迎えている畑での作業ということで総収穫量は22ｋｇにもなりました。おいでくださった皆様、ありがとうございました。

▲コットンを手に集合写真をパチリ

私たちの活動を会員として支えて下さい。
会費納入をよろしくお願い致します。

会費:活動会費(実際に活動に参加される方と、会報購読という形で支援して下さる方) **2,000円／年**

賛助会員(資金的な面から支えて下さる方と法人・団体会員) **10,000円／年**

郵便振替(02110-0-21908)でお送り下さい。

★つぶやき

一日100人が自殺する「自殺大国」という驚きの記事を目にしたことがある。残念なことに先進7ヶ国でトップという。最近は若者がネットを通して複数で自殺するという信じられないニュースが相次ぎ衝撃である。ある調査によれば自殺は2つ以上の理由(ストレス要因)が重なった時に起こり易いという▼生存権は保障されている日本社会。安心して働き、食べ、笑い、夢を抱き明日を目指す。そうした当たり前の日々の中、己の生存意義を見失う様な出来事に遭遇することもあるのだ。今まで私自身つゆ程も考えた事はなかったが、最近それに近い感情を味わった。76歳を越え体力が落ちてきたことを自覚していたが「いつも元気で頑張ってるね」との周りからの声援は嬉しくもあり、自信にもなっていたから80歳までは頑張れるかもと思っていた。その矢先、仕事上でトラブル。かつてない辛さを体験した。時を同じくして知人が、私の友人に吐いた「うすっぺら」の一言がどうしても頭から離れなくなった▼この二つの出来事以来何故か涙が溢れ止まらなくなった。当然、目は腫れ顔の相も変わり鑑を覗くのも嫌になった。無口になって行った。同僚がハラハラ見守ってくれてる事も分かった。診療内科に駆け込み心境を全て話した。アドバイスを頂き、服用しながら数カ月で元の私に戻ることができた▼他人からすれば取るに足らない問題かもしれないが、当人にとっては存在意義や尊厳すらも見失う程重大な事態に陥っていたのだ。人は常に何かに躓きもがき苦しみながら生きている。生命力旺盛な人、弱い人様々である。大切な事は回りがその変化に素早く気づきアドバイスして行くその上で見守ってあげる。その大切さを痛感した貴重な体験だったと思う。

(K)